
イレイザー ―仁和歌者―

ヒメノムラサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イレイザー ― 仁和歌者 ―

【Nコード】

N34080

【作者名】

ヒメノムラサキ

【あらすじ】

仁和歌とは、江戸時代から明治時代にかけて、宴席や路上などで行われた即興の演劇・寸劇のことです。路上で突然始まり、衆目を集めたために「にわかが始まる」という意味で、そう呼ばれたとされています。また仁和歌を演じる役者たちのことを仁和歌者といえます。珠玉と呼ぶには程遠く、されど射干玉程度には光輝くイレイザーシリーズ短編集。あなたを楽しませる「仁和歌」と成ればこれ幸いです。※『イレイザー ― 人物紹介―』の内容をこちらに移しました。今後の更新もこちらで行っていきます。ご了承ください。

『氷柱少女の登場人物』

おほのき
【大野木 ココ】

イレイザーシリーズの主人公。

アルビノ十美(?) 少女十ポン刀十記憶喪失(正確に言うくと七歳までの記憶が不明瞭)と、考えた奴が未だに思春期特有のあの「病」を患っていると思えないキャラ。某ケータイ小説の「とりあえず社会的にアウトなスイッチ全部押しちゃえ♪」みたいなノリにやや通ずるところがある。多分。

基本気弱で要領も悪いが、「年頃の女子が抱える身体的・精神的コンプレックス(作中ではココが〈女の子の部分〉と表現。なんかエロい)は絶対に馬鹿にしたりからかったりしない」、「弔い合戦は死者を盾にして罪の意識から逃げる言い訳に過ぎない」などなど、独自の美学や行動規範を持っている。ただ、その分その美学や規範から逸れた行動をとってしまった際の自己嫌悪は凄まじく、立ち直るのに一苦労したりすることも。

勘違いされやすいがレズビアンではない。あのような短編(『冷たい指輪』を参照)書いたが断じてそうではない。あれは一片の隙もなければ一点の曇りもない「義姉妹愛」だ。それ以上でもそれ以下でもないぞ。

「誰にも知られることのない、どんなに命を懸けて頑張っても誰にも感謝されることのない世界で孤独に戦う主人公」と、この設定だけ見るとひと昔前の変身ヒーローを彷彿とさせる。というか意識してそう書いた。うん。

あきら
【大野木 晶】

主人公の義姉その一兼主人公の癒し役その一。

当初は髪型がポニテだったが、ハーフアップの方がオトナっぽい
|| アネゴキャラっぽかったのでそっちに変更。赤いピアスをさせた

のもそのため。もっとも小説という媒体なんであんま意味はない。

外見は活発、中身は乙女(?)という特にこれといって変化球を意識していない「ド」が付く程のストレートキャラ。ココからの義姉としての評価は割と高めだが、ココを特化して溺愛しているため「六人義姉妹のお姉ちゃん」としては正直微妙なところ。そんな彼女もごく稀にいいことを言う。まれーにだけど。

あと念のためもう一度言うがココはレズビアンではない。そうではないが、晶はまあうん……どうだろう。

空気は読めない。というより読もうともしない(アルビノの義妹に平然と『ユキンコ』という仇名を付けるあたり、その神経のズ太さは中々のもの)。結果それが引き金となって要らぬ争いが起きることも多々あるが、個性溢れるわりに受け身姿勢が多い義姉妹の中では良くも悪くも事態を動かすために欠かせない存在。

頑張れ「皆大好き晶お姉ちゃん」。

【大野木 鏡花^{きょうか}】

主人公の義妹その一兼主人公のサポート役その一。

典型的な二次元だからこそ許容されるキャラ。こんな中学生女子(13)いたら怖過ぎるわ。フツーに泣くわ。ちなみに年齢だけだと誤解を受けやすいが中一ではなく中二。……いや「病」の方じゃなくてそのままでの意味でね？

メガネっ娘+賢者という設定のみが決まっていた段階では、裏設定も含め「隙のないクールビューティー」を目指していたはずが、気がつけば「照れ屋」、「義父のことが好きで妖怪研究を始めた」、「甘いものが好きなのをココ以外の人間に隠している」などなど隙だらけになっていた。隙のないクールビューティー(笑)。

訊いてもいないことまでベラベラとひけらかす昨今ありがちな賢者キャラにしては珍しく(そうか?)、自らが努力の未取得した知識は人に訊かれぬ限りはまず披露することがない。この辺りは恥じているというより弁^{わきま}えているという表現の方が正しいか。そういっ

た点でも割と常識人（思ったことを遠慮なくズバズバ口にするくらいはあるが）のためか、家族の中では結構オイシイ立ち位置にいる。程よくいいじったりいいじられたり。ココ曰く「色んな意味で可愛い子」。他ならぬ作者自身もそう思う。

【大野木 ささめ】

主人公の義姉その二兼主人公のサポート役（？）その二。

個人的に名前は一番気に入っている。ちょっとトゲのある女の子のひらがな名前ってめっさツボ。皆もいくら特別な意味が込めやすいからって漢字ばかり優遇せず、もっとひらがな名前（特に女の子）の素晴らしさを知るべきだと思う。例えば「さくら」って名前の女の子がいるとするじゃない？ そしたら「桜」って漢字で表記するより、ひらがなで表記した方が何というかこう……可愛いだろうがっ！

六人義姉妹一の常識人。日頃の粗野っぽい言動（本人も自覚はあるが改める気はないらしい）から他人に一匹オオカミの如き印象を与えがちだが、学校ではそれなりに社交性もある優等生。というか、他の義姉妹の社交性が低過ぎ。晶だって一見友だち多そうに見えて、朝から晩まで場所を問わずユキンCOLOVE状態だから実質友だちいないに等しいし。

つくしを特別溺愛していたように思われがちだが、実は等しく世話を焼いていたらしい。それは晶が義妹達と「仲良くなる」ことを重視したのに対し、ささめは義妹達を「守る」ことを重視したから。要するに愛し方・接し方の違い。まるで不器用な父親のようだ。完全に未登場の義父を喰っているな……。

涙腺が緩むと、「ココとの一件（『イレイザー——氷柱少女——』参照）」を言い訳にしがちだが、第一弾を見る限り義姉妹の前で泣かなかっただけで元来涙脆いタチだったと思われる。普段強気な女の子が実は泣き虫とか、もう最高だね。大好物です。

【大野木 ひな】

主人公の義妹その二兼主人公の癒し役その二。

晶とは異なるベクトルでの癒しキャラが欲しかったのと、何かと不器用なココが不器用なりに「いいお姉ちゃん」をやっているところを書きたかったから作ったキャラ。五女が〈不在〉の段階で物語がスタートするので「ロリ分足りねエ……」とかそんな衝動から作ったキャラなんじゃないの言われたらその発想は言うまでもなくあった。

ちなみに名前が「ひな」とひらがな表記なのは前述した私のこだわりを参照。「雛」だと画数多いし、何か可愛くないよね。

四歳児離れた空気読解能力の持ち主で、末っ子にして縁の下の力持ち。第一弾『イレイザー——氷柱少女——』ではココとささめが「壁」を乗り越えるためのきっかけを作ったと言っても過言ではない。

とはいえ、その出来過ぎた義妹っぷりがココには逆に心配のタネになってる。右耳に抱えた障碍しょうがいがその痛々しさに拍車をかける。ちなみに身内に対しても敬語を使う理由は不明。親しき仲にもなんとやらがこの年にしてモットーなのか、それとも……。

一番の問題は出しゃばらないというか縁の下の力持ち過ぎて出番が少ないこと。そこらへんは番外編で補完したいなあ（願望）。

【大野木 つくし】

主人公の義妹——という事実こそあれ、言うまでもなく「ささめの義妹」を意識して書いたキャラ。打算的な言い方をするときささを第三弾から副主人公として扱えるキャラにするための布石。身も蓋もないな。でも愛は込めたから全然オツケー。

第一弾『イレイザー——氷柱少女——』から〈不在〉故ココやささめの独白でしかその人物像は語られていないが、どうやらやたらと精神年齢が老け込んだ娘の多いこの義姉妹にしては珍しく年相応の振る舞いをしていた模様。

義姉たちのことは「○○ねーちん」と呼ぶ。末妹が優秀過ぎるの
でちょっとくらいアホのコ的な要素を入れてみた。どうせ登場数あ
ってないようなもんなんだし語尾付けちゃえばいいでね？ という
悪魔の囁きも聞こえたけど、それは流石に止めた。特徴的な語尾付
いたキャラ出しちゃうと「ああこのヘタレ作者語尾でキャラの書き
分けしようとしてるな」とかわれそうでコワイので。あつ、そう
いう意図とか抜きで語尾キャラ使ってるって方いたらすいません。
ヒナ同様番外編で補完してもいいけれど、この娘の場合は義姉た
ちの独白のみで詳細な人物像は読み手の想像に任せるってスタイル
でもいいかなとは思ったりする。ホント正直な話ね。

【大野木 まこ】

大野木六人義姉妹の義母。

昨今の漫画やアニメにありがちなおっとりママンキャラのテンプ
レ——だったら良かったのになあ……げふんっげふんっ。

美人で優しくて料理上手な理想の母親——というよりは姉さん。

晶曰く「年の話題を振ると怒る」とのことだが、実年齢はまだ二十
の半ば。実際のところは、義娘たちにとって親しみやすい対象であ
るために、わざとおどけて怒ったふりをしているのかもしれない。

鏡花に何かとちょっかいをかけるのは、ココ曰く「真面目な鏡花
さんの反応を楽しんでいる」とのこと。まあそれも——あるにはあ
るのだろうが、やはり閉じこもりがちな鏡花の性格を少しでもオー
ブンに、という思いが強いのだろう。しかし、肝心の鏡花はひそか
にココと割と女子中学生らしい交流を図っていたりとどうにも母と
しての努力が報われていないというか、空回りしている（第三弾で
はココに六花模様の弁当包みを買ったりと母以前にそれは人として
どうなんだという）点も。一部義娘たちから姉さんや呼び捨てにさ
れているところからも、「友だち親子」の感覚が抜けきっていない
ことが見て取れる。

とはいえ、何だかんだでささめからは出来た大人として一目置か

れている模様。そう、彼女の子育て奮闘記はまだ始まったばかりなのである。

余談だが、『大野木』という名字と第二弾に登場した『鬼神』という単語から、民俗学をかじった読者なら今後のストーリー展開が大凡予測できるか——という別段そうでもない。

『蹈躰事変の登場人物』

【ジョシユア・ファイブセンス】

『ファイブセンス探偵事務所』の探偵。

一巫女が安楽椅子探偵ポジションを担っているため、不本意ながら行動型の探偵を務めている。が、謎多き経歴から一夜街の私娼や公娼、イレイザー養成学校の生徒、果ては既来界を統治しているヴンダーカンマー管理機構にまで知り合いがいるなど、とてつもなく顔が広い分何だかんだで適役と言える。

『イレイザー——蹈躰事変——』が概ね彼の視点によって語られる物語であるため彼の詳しい容貌は不明だが、「どうせその調査とやらも愛人や遊女に任せっきりなんだろうが」という一巫女の台詞から察するに決して見てくれは悪くないと思われる。そう考えると、魔道や導力などといった超常的な力がさも当然の如く跋扈するこの世界において、イケメンのくせに非戦闘要員というわりと珍しいキャラなのかもしれない。

一巫女さんに拾われた——という彼の独白だけでは誤解を招きやすいが、二人の年齢差からわかる通りこれは大卒後プーだったところを一巫女にスカウトされたという意味である。その後しばらくは『橋姫』の間借人となるわけだが、その間彼が何をして生計をたてていたのか、そしていかなる経緯があって「探偵」という職へ就くに至ったのかは不明である。

ちなみに作中十四歳の少女を明らかに恋愛対象として見ている記述があったが、これは彼が幼女・少女に限定して特別そういった感情を抱いているのではなく、単にストライクゾーンが幅広いだけである。つまり無類の女好きなわけだが、だからといって特別女性に優しいわけではない。

【負討 おしう 一巫女 ひみし】

『橋姫』の楼主。

また『名家』最高位に君臨する負討家の末裔でもある。ちなみに『名家』とは魔道を用いギノーを退治することを使命として課せられた家柄の呼称である。ギノーが今以上に跋扈していた時代は戦巫女として活躍していたらしいが、主なギノー討伐者が魔道士からレイザーに移行した現代では、好きなきに飲み食いし好きなきに眠り好きなきに書見をするまさに天人の如き自堕落な日々を送っている。

民俗学、宗教、妖怪などに造詣が深い一方、実力を持っていないがら事変に武力介入することを好まないため、四人の中では「動かないデータベース」という役割を担っている。が、肝心の探偵があくまで探偵〈役〉に過ぎないため、どちらかと言えば彼女の立ち位置は安楽椅子探偵と呼ぶに相応しい。自分の推理の正しさを立証しようとして、真相をばかしたまま事を片付けてしまうあたりなど、まさに安楽椅子探偵の鑑と言えよう。

ちなみに『レイザー——蹈鞴事変——』での彼女は大変わかり辛いが常時デレ状態である。ジョシユア、庵、アカシャ以外の男とはまともに口も利かないどころかそもそも視野に入れようとさえしない。しかし、一度気を許した相手には抱擁、膝枕（無論男性側が枕役）、終いには接吻まで躊躇なく行うためジョシユアからは「人間関係が零と百で構成されている女」と心の中で評されている。

一人称が「僕」であり男口調なのは過去の出来事に原因がある。ぶっちゃけジョシユアと被るので書き手としては止めて欲しい。

あと名字で呼ばれることを嫌う。そのわけは彼女の名字をさん付けしてみれば嫌でもわかる。

【あかつきいおり 暁 庵】

一巫女の側近。

代々負討家に仕えてきた暁家の末裔。一巫女が戦巫女として戦線にいた時代は魔道士として彼女の背を守護してきたが、一巫女がへ

巫女〉を捨て負討家を離れ戦線を離脱した今では、妓楼『橋姫』の「遣り手」として彼女の側に仕えている。

着物の上からでもわかるたくましい体躯に顎鬚を蓄えていたり、実に男性的な容貌をしているが、言葉遣いや話し方は一般的な男性のそれよりやわらかく感じる。男であって男ではなく、では女かというところも違う——そんな独特な空気の持ち主である。「遣り手」といえばときに遊女たちのカウンセリングもこなす仕事なので、その相談者たちに異性を意識させる心配がないことを考えれば、何やら相当な適役に思えてならない。ちなみに、人物描写のシーンにてジョシユアは言及していないが垂れ目である。

主である一巫女を様付けではなくさん付けしているのは言うまでもなく一巫女の意向に寄るものだが、彼女に付き従う者の中でさん付けを許されているのは、庵ただ一人である。つくづくデレのわかり辛い女である。でも、さん付けはジョシユアと被るのでやっぱり書き手としては勘弁してほしい。

四人の中での役回りは、主である一巫女や『橋姫』で働く遊女たちを守護する「最強の盾」である。

【アカシャ】

イレイザー
抹消者。

イレイザーライセンス取得者なら誰もが使えるはずの導力メディテーションが使えないにもかかわらず、名家出身の魔道士ですら前例のない「ある異能」が使える謎多き男。実のところ、彼は異能を持っているが故ギノーに素手で太刀打ちできるのではなく、人間誰しもが持っている「あるモノ」を持っているが故にそれができるのである。よくある無力化系異能力者かと思いきや実は単なる常能力者だったよ、というフェイント。何やらひどいネタバレをしたような気もするが、真に重要なのは彼がこの〈体質〉を手に入れた経緯なので、別段気にする程のことでもない。

魁偉かいいな風貌から粗野な印象を与えがちだが、スーツ姿のときはネ

クタイを留めていたり、携帯灰皿を常備していたりとわりとマメな男である。『イレイザー ― 踏鞴事変―』の戦闘パートでは、少女の最期に無骨ながらどこかナイーブな一面を覗かせている。ジョシユアや一巫女の変人っぷりは言うまでもなく、一見常識人の庵ですら一巫女に傾倒し過ぎているきらいがあるため、実は四名中一番の常識人なのかもしれない。ちなみに第一弾のココの決め台詞(?)と彼のそれが酷似しているのは仕様である。

天沼之宴とは浅からぬ因縁がある模様。ヴンダーカンマー管理機構に嘘の報告をしてまで彼が天沼之宴に執着する理由とは。彼とその呪術を結びつける縁が、異世界の住人であるココの「空白の七年間」と今後結びついたりつかなかったり。

担うポジションは、庵に護りを任せ、ジョシユアが捜査し、一巫女が叩ける〈形〉にした諸悪の根源を、圧倒的なパワーで貫き通す「最強の矛」。

『無貌彷徨の登場人物』

【笹ヶ瀬 衛】やいがせ まつる

ココと鏡花のクラスメイトで、名字通りのサワガセ担当。

昨今流行の「ウザかわいい」を目指して作ったキャラクター。そのため、心霊スポットと思しき場所でさんざん写真撮影をしておいて、いざ心霊写真が手に入ったら、どうしようと友だちに泣き付いたり、その一件で世話になった鏡花の趣味を、知ってか知らずか「お子サマ」の趣味と小馬鹿にしたり、ココに断りもなくグロ画像を見せようとしたりと、とにかく読者がイラッとさせられる言動が目立つ。

実際『連続動物〈盗難〉事件』のココを見てみると、「わりと本気でウザがってないか……？」と思しき台詞がちらほらとある。そう思われることは笹ヶ瀬の自業自得なのだが、一部地の文がややキツ過ぎるせいで、返ってココが腹黒に見える始末。

ただ『無傷』における意趣返しシーンなどを見る限り、ココのお腹は天使のように真っ白というわけでもなさそうである。というか、笹ヶ瀬除霊イベントに鏡花を巻き込む辺り、もう充分腹黒なんじゃないんだろうか、ココさん。和菓子一個でそれを引き受ける鏡花も鏡花だが。

ちなみに「空気が読めない」という特徴は晶にも当て嵌まるが、彼女のそれはムードメーカーとして基本意図的に行われているため、笹ヶ瀬のそれとは根本的に異なる、気がする。

実は無駄に重い裏設定があったが、氷垣と藤枝の存在を飲み込まないため、またココにとって笹ヶ瀬は日常のシンボルであったため、『笹ヶ瀬 衛』にて語られた過去もそれなりのものとなった。多分フアザコン。

【藤枝 蘇子】ふじえだ もとし

ささめのクラスメイト。

一応「ネタバレ厳禁」の方針で書いているため、彼女についてあまり多くを語ることはできない。

ささめ曰く一片の隙もない優等生。スタンダードな三つ編みにメラニン色素の有無を疑うほどの白い肌、年代にはあまりないおっとりとした雰囲気、今時珍しい(?)「子」の付く名前も相俟って、古式ゆかしい女学生を絵に描いたような人物である。

大野木家に起きたつくしの一件を知っている(事件の内容から考えて、笹々瀬も当然知っているはずだが、それに対する詳しい描写は本編中にない)ため、ささめがこれ以上大切な何かを失うことを恐れている。それゆえ、矛先は自らの秘密に近付こうとしている(と、藤枝が判断した)少女Sに向いたわけだが、想い人である少年Hと後輩である少女Oの仲に心乱された結果、凶行に走ってしまう。彼女の冷静さを欠いたのは、単に純粋な恋心か、それとも……。

ちなみに『藤枝 蘇子』にて、ささめにバレーボールのフォロウを願うシーンがあったが、あくまで球技が苦手なだけであって、決して運動オンチではない。むしろ基礎体力は中の上レベルである。

あと演劇部所属。整った目鼻立ちと女子にしては高い身長から男装がえらく似合うらしい。

【氷垣^{ひがき} 蓮太郎^{れんたろう}】

ココの先輩でささめのクラスメイト。

彼もまた、蘇子同様多くを語ることは叶わない。

少女のように繊細な柳茶色の髪と透き通るような白い肌——って美白率高いな第三弾。ココ曰く自分の違和感バリバリの白さとは違う、見ていて綺麗だなと思える純朴な白らしい。ただ、ここで忘れてはならないのは、我らがココさんの他の追隨を許さぬ自尊心の低さである。彼女から見れば大半の色白は「美白」に映る。

某後輩曰く学ランが似合わないらしい。これにはココも同意しており、ブレザーならしっくりきただろうと心の中で感想を述べて

いる。

異性関係に疎いココからは、異性に自然と耳打ちをただけで、実は遊び人なのではないかと疑われていた。ココさんマジピュア。

既読者ならもうおわかりだろうが、彼はロクでもない人物といえ
ばロクでもない人物である。しかし、本作はあくまでココとささめ
の視点（一部例外有り）からしか語られないため、彼の詳しい人物
像を読者が知ることは難しい。蘇子と同じで抱えている問題・テ
マが大き過ぎるキャラクターなので、彼女ともども作者が今より齡
と経験を重ねてから、もう一度じっくり考えていきたいなあと思っ
ている。

『冷たい指輪』（前書き）

ある初秋、義姉妹の話。ほんのり百合百合しいので苦手な方はご注意ください。

『冷たい指輪』

初めて握ったあの娘の手は、思っていたよりも冷たいものだった。

バスから降りると、冷たい秋風が吹きつけた。思わず首を竦める。秋の初めにしては少し冷た過ぎる気がした。朝、今日は冷えるからとマフラーを巻いてくれたまこ姉さんに、心の中でありがとうと言った。

「ユキンコ」

聞き覚えのある声に目を向けると、晶がバス停のベンチに座っていた。ハーフアップでまとめた髪、赤いピアス、ファー付きのミリタリーコート、デニムのショートパンツ——寒くないのかなと剥き出しになっている脚を見て思う。

晶は気だるそうな動作で右手を挙げ、ようと言った。

「気がつかなかったのか？ 視野狭いなあお前」

「ごめん。……迎えに来てくれたの？」

「まあな」

「だったら自転車で来てくれたら良かったのに」

そしたら二人乗りできるし、と私が目を細めながら続けると、

「いやだよ。風切ったら寒いーじゃん」

晶は自分の肩を抱きながら唇を尖らせた。……やっぱり寒かったんだ。

だったら何で来たの、とはさすがに言わないし言えない。迎えるんて必要ないことはわかっていても、こうして来てくれたこと自体は素直に嬉しかったから。

「さーて、さっさと帰るか。私まで風邪ひいたんじゃ洒落にならん」
晶はそう言って立ち上がるも、腕を擦るばかりで中々歩き出そうとしない。どうしたのと私が尋ねると、ずいと手が差し出された。……ああ、そういうことか。私は差していた日傘を晶に渡した。晶

が心持赤い頬を緩めて、んっと小さく頷く。そうして私たち二人は互いに寄り添うようにして歩き出した。

帰り道はよく散歩のときに通る並木道を選んだ。近道どころかちよつとした遠回りだ。ただ、こっちの方が紅葉が綺麗なんだと私が言くと、じゃあそっちにしようと言ったと晶が即決してしまった。

——さっさと帰ろうなんて言ってたのにいいのかな。

「診療所のセンサーなんて言ってたの？」

「大したことないよ。ただの風邪。薬三日分で様子を見ようって」「ふうん」

まあ季節の変わり目だし気を付けないと言って、晶が鼻を吸る。珍しく——会話が途切れがちだ。私が風邪気味でぼんやりしているせいではないと思う。寒さのせいか晶の口数が少ないのだ。改めて日頃の〈会話〉が晶の人柄によって成り立っているのだと思う。

「ねえ」

「うーん？」

「——手袋、付けないの？」

そのことが、少し悔しかったのかもしれない。自分にだって会話のきっかけくらい作れる——そんな風に躍起になった結果、自分でも何が言いたいのかわからないことを訊いた。

「付けねえよ。付けたらコレ見えなくなるじゃん」

晶はそう言って私に左手を見せた。六色の石を使ったカラフルなリングと狼みたいなお動物をモチーフにしたリングが、人差し指と中指にそれぞれ嵌っていた。晶と一緒に遊びに行ったとき、晶が買っていた覚えがある。——確かインディアンジュエリーだったっけ。

「でも、手冷たいんでしょ」

「オシヤレは寒さとの戦いナリってエライ奴が言ってた。それにポケットに突っ込んでるから割とヘーキ」

「……それ結局見えてないじゃん」

「そーい、やあ、そーだな、と晶が他人事みたいに笑った。何故か嬉しそうだった。私は日傘の柄を握って白くなっている晶の指先を見遣ってから、じゃあせめてさ、と右の手袋を外した。」

「これ使ってよ。晶の手見てる方が寒いから」

私は押し付けるようにそれを渡すと、早々と右手をポケットに仕舞った。選択権は与えないという私なりの意思表示のつもりだった。それが伝わったのかどうかは定かじゃないけど、晶はうんまあアリガトと照れたように言って、その手袋を嵌めた。それだけのことで失いかけていた自信が取り戻せるのだから、つくづく自分は単純なんだと思う。

——本当は余計なお世話だったんじゃないかな。

「隙アリっ」

私の胸がずきりと疼くよりも早く、晶は私の右手をポケットの中で握ってきた。思っていたよりもずっと柔らかくてあったかい手。その中に混じる硬質でひやりとした感触。

——記憶の中にある晶の手は、こんなにも温かかっただろうか。

「へへへ。若さと熱を貰おうかと思ひまして」

「……冷たい」

「そりゃそーだろ。手袋つけてなかったんだから」

「そーじゃなくて——指輪」

少し間があって、晶がああ、と納得がいったとばかりに声を上げた。それから何を思ったのか、私のポケットから自分の左手を抜くと中指に嵌めていた指輪を外し、私に手渡してきた。

「……なに？」

「なにつて——付けろよ。わかり易く言うとへ痛み分けっつてやつ」

——全然わかり易くなんか無い。

そうは思いつつも、何だか釈然としないまま指輪を受け取ってしまう。……こういうのってどこに嵌めたらいいんだろう。右手とはいえ、なんとなく薬指に付けるのは抵抗があったので、迷った末中指に嵌めることにした。それを見た晶が、一瞬ぎょっとしたような

顔をした気がするけど気のせいかな。

そして、私たちはもう一度ポケットの中で手を繋いだ。お互いの指を絡めるように握っているせいで、指輪同士がかちゃかちゃと擦れ合っている。

「やっぱり冷たい」

「応。私も冷てえ」

「……〈痛み分け〉ってこういうこと？」

そういうこと、と晶が悪戯っぽく笑う。どうして指輪を外そうという考えが出てこないんだろう。やっぱり変な娘だと思う。そう。変な娘——その印象から思い出すのは晶と初めて出会った日のこと。よろしくなココ、と屈託のない笑顔で握手を求められたあの日のこと。

……ああ思い出した。あのときも晶は指輪を付けていたんだ。その指輪が硬くて冷たかったから、私はつきり晶の手は冷たいものだと思え間違いをしていたんだ。澄み渡るような寒空の下でも、今ここにある〈本物〉はこんなにも温かい。指輪が冷たく感じるのは体温とのギャップのせいではないかとさえ思う。

私はきゅっ、と右手に力を込めた。

「……どした？」

「ううん。……若さと熱を貰おうかと思いましたが」

熱はともかく若さは無理だろ、と晶が笑う。

かちやかちやと擦れ合う音が、ポケットという二人だけの空間の中で、密やかに響いていた。

『冷たい指輪』（後書き）

ホントはもったときゅんきゅんするようなヤツが書きたかった。公野櫻子先生みたいな。あーいや前言撤回。例え出来たとしてもあそこまできゅんきゅんしないや。ピンクのハートマーク過多で土器がムネムネしてエライことになってしまう。

というわけで「恋愛」というカテゴリーに分類するにはあまりにあっさりめな短編を御送りさせていただきましたヒメノムラサキです。女の子同士の恋愛っていうのは個人的に成就すると羨えるというか「女の子なのに女の子を好きになるなんて……」みたいな葛藤を楽しむタチなのでそこらへんもあっさりめになった要因かと。

余談になりますが右手中指に付ける指輪には四つほど意味があるそうです。大抵靈感、直感に關係があるみたいですな。

一つは、邪氣から身を守る。

一つは、現実的な力を身に付ける。

一つは、自分の意志のままに行動したいときに付ける。

……で、あとひとつが問題といえますか晶がぎょつとした理由なのですが、はてさて。

『妖怪考察』（前書き）

ある夜、義姉妹二人と、彼女らを取り巻く〈彼ら〉の話。

『妖怪考察』

鏡花さんは義姉妹一の読書家で、驚くほど日常生活に必要な知識を持っていた。

特に妖怪に関する知識が豊富で、話の内容はいつも難しかったけど、聞いていて決してつまらなくはなかった。だって、妖怪の話をしているときの鏡花さんは、いつもよりずっと眼が生き生きしていたから。始まりは玲一兄さんとはいえ、彼女自身妖怪というモノに強く惹かれているのだろう。普段あまり感情を面に出さない鏡花さんのそういう一面を見るのが、私は好きだった。

私たちの〈会話〉は、大抵いつも私の問いから始まる。それに鏡花さんが答えることで〈会話〉は進む。

そして今日、私は訊いた。まこ姉さんが度々口にする〈お化け〉とは何なのか、と。

今はその回答待ち。私はベッドサイドに腰掛け、鏡花さんから貰ったつぶつぶ苺ポッキーをかじりながら、彼女の背中を眺めている。鏡花さんは、本当に確認できているのかなと疑いたくなるような速さで、ファイル——鏡花さん手製の妖怪事典——に綴じたノートのページを捲っている。

「——あったわ」

鏡花さんの気持弾んだ声が聞こえた。振り向いた表情にも達成感のようなものが見える。

「あったって……」

「まこの言っていた〈お化け〉の資料よ」

当然でしょう、とばかりに鼻で笑う鏡花さん。

正直、きょとんとしてしまった。……あれってまこ姉さんの作り話じゃなかったんだ。

「実在するんだ……あの〈お化け〉」

「実在、という言い方をすると語弊があるかもしれないけど——ま

あ、いるわ。おさきという〈お化け〉がね」

「ふうん。……それで？ おさきは分類すると何になるの？」

私の言葉を聞いた途端、鏡花さんが眼をむいた。

「……どうしたの？」

「意外だわ。あの話憶えていたのね」

「うん、憶えてはいた、けど……」

ダメだったのと言って、私は小首を傾げる。

「……別に。意外だと思っただけよ」

鏡花さんが意味深に微笑んだ。それから顎に拳を当てて、考え込むように唸った。

鏡花さん曰く、お化け——いわゆる化け物は大きく三つに分けられる。一つは幽霊、一つは変化^{へんげ}、一つは妖怪。

簡単に言うと、幽霊は死者から抜け出た魂が、あの世に逝くことなくこの世に残って漂うもの、変化は人間以外の生物、主に動物が魔力によってその姿を変え人間を騙すようになるもの、そして妖怪は得体の知れない力を持った正体不明の異様——つまり幽霊と変化、そのどちらにも属さず、属せないもの。

私はてっきり妖怪は生まれたときから妖怪なのだ、と思っていたけれど、どうやらそうでもないらしい。たとえば妖怪と聞いたとき一番イメージされすいだろう鬼は、仏教的には二通り——最初から鬼だったものと鬼になる人があるという。ちなみに鬼になる人は、よくわからないけどいつも女性だ。

「おさきというのはね、分類するのが困難なのよ」

「そうなの？」

ええ、と鏡花さんが頷いた。

「一応は変化の類だとされているけれど、おさきは狐や狸のように実在する動物なのかどうかはつきりしないから。過去におさきを捕獲した、と言う人がいるにはいるけれど——真相は不明のまま。捕まえられたおさきはイタチのような姿だったそうね」

鏡花さんはこめかみに触れたまま、なおも続ける。

「そもそも妖怪と変化の区別自体、凄く曖昧なところがあるのよ。付喪神つくもかみなんか良い例。……ほら、器具が百年たつと霊魂が宿って化けるというアレのこと。〈誕生〉の経緯から考えて変化に分類できそうなものだけど、動物が姿形を変えるのとは違い、付喪神の場合は全く異なる存在に〈生まれ直す〉わけだから。そういう意味では妖怪と呼ぶほうが正しいのかもしれない、という具合にね」

そこで、鏡花さんは控え目に咳払いをした。

「さて、話はおさきに戻るけれど、おさきは人ではなく家屋に憑くのよ。人間には不可視の状態で家に棲み付くのね。そして食卓で食器を叩くだとか、そういうマナーの悪いことをすると食事を嗅ぎ付けて出てくるの。ただご飯と言ってもおさきはご飯のミしか食べないわ。人間みたいにカラごと食べるなんて真似はしない」

「ミと、カラ？」

「ミは命、カラは器（身体）といったところかしら。前者は目に見えないもので、後者は目に見えるもの。ここで言うミは漢字で書くなら魂魄の『魂』とも書けるし、幽霊の『霊』とも書ける。日本の伝統的な考え方では、食事の本来の目的はミをとることとされていた。私たちはその目的達成のために、カラも一緒に食べているに過ぎない。けれど、おさきは違うわ。おさきは食べ物のミだけを食べることができるの。もちろんカラ——私たちの目に〈食べ物〉として映るそれには何の変哲もないから、私たちは目の前にあるそれが、抜け殻だとは気が付かない」

「……カラを食べたらどうなるの？」

「別にどうにも。ただ栄養にはならないわ。カラだけならね」

言って、鏡花さんはポッキーをかじった。何か引かかる言い方だった。

「とどのつまりおさきの役割は、伝統的な食事作法の崩壊の警告なのよ。人間よ、他の生命からミをもらいながら生きている感覚を忘れるな——とね」

役割はそれだけじゃないわ、と鏡花さんは続ける。

「例えばとある村で、Aさんの家は豊かになっていくのに対し、Bさんの家は貧しくなっていく。何かしら明確な理由があるならまだしも、同じことをしているのに貧富の差が拡大するのはやはり気に食わない。ここでAさんとBさんだけの問題として片付かないのが、村という共同体の特徴ね。ギクシヤクしたものがあるだけで、村全体の空気が悪くなってしまう。そうになると、村人はこう考えるの。貧富の差を生んでいる犯人はおさきだ。だからおさき祓いの儀式をしよう、とね」

「ふうん……うん？ あれ、何かおかしくない？」

「何が」

「おさきが貧富の差を引き起こした犯人だってこと。おさきの能力はミを食べることなんでしょ？ミを食べられたところで、食べ物そのものがなくなるわけじゃないんだし。貧富の差とかとは関係ないと思うんだけど……」

「——鋭い」

鏡花さんがにやりと微笑んだ。どうやら私の質問は、想定範囲内だったみたいだ。

「貧富の差を引き起こしているのはおさきの能力ではなく性格にあるの」

「……性格？」

「秤が好きなのよ、おさきは。だから秤を見かけるといついつ乗っってしまうの。——ああ、これだけじゃ何のことかよくわからないわよね。かつて、村に生糸や薬草やらを買いに来ていた仲買業者は、天秤を使ってそれらの重さを計測していたの。さて、ここでその天秤におさきが乗ったと仮定しましょう。そうすると何が起こるかしら——ちなみに天秤に乗っている間も、当然おさきの姿は不可視のままよ」

ふむ、秤に乗るのが好きで、けれど姿は見えない。——ああ、そっか。

「計算がおかしくなるんだ」

「そういうこと」

「ええっと、でもそれだとさ。どちらか一方がどうなる、とは限らないんじゃないあ……？」

鏡花さんが眉を顰めた。ひそ……うん、今のは流石に自分でもわかる。言葉が足りなかったんだ。

「だからさ、秤って二つあるでしょ？ そのうちのどっちにおさきが乗るかはわからないんだから、それで貧富の差を生むっていうのは、ちよつと無理があるんじゃないかなというか……」

「——ああ、そういうこと。その点なら抜かりはないわ。おさきは一度荷の方に乗る癖が付くとずっとそちらに乗り続けるし、逆に錘の方に乗る癖がつくとずっとそちらに乗り続ける。その日の気分でどちらに乗るかを変えたりはしないのよ。結果、一方の家はきちんと裕福になるし、もう一方はきちんと貧乏になる」

き、きちんと……ね。

「以上のことから、おさきはもう一つの役割を担っていることが言えるわね」

「……濡れ衣を着せられる役？」

「ストレートな物言いね」

まあ嫌いじゃないけれど、とどこか意地悪く笑う鏡花さん。

「だって……得体が知れないならともかく、これ得体が知れた不幸じゃない」

何もないところで転んだとか、道に迷ったとか、そういうのをお化けのせいにするのならまだ可愛げがあると思う。でも、こういうのはどうなんだろう。昔の人は昔の人で、真剣だったんだろうけど。

鏡花さんがくつくつと笑った。拗ねた子どもを見るような眼をしていた。

「そうね。その通り。でもね、ココ。今も昔も変わらず、スケープゴートは社会の安定を守るために必要なもの。やり場のない負の感情をぶつける対象は、悲しいけれど用意しておくに越したことはないのよ。ただ人外の実在に濡れ衣を着せる場合、まず人間の目に視

える形が必要になってくる。目に見えない、形のないものに衣は着せられない。そんなあやふやなものに、負の感情を抱くのは誰だっ
て困難だからね。だから、昔の人々はその無形の共通概念に名を与
えた。名を与え、その姿形を語り、絵画に描き、夢に見た。それが

――

鏡花さんはそこで言葉を切った。私にその先を促していることは、
すぐにわかった。

「……お化け、ってことだよな？」

途端、あちこちから人が囁くような声が聞こえ出した。
ぎよっとするが、視点をあっちに合わせた覚えはない。

――私のよく知る〈彼ら〉の声なのだろうか。

「ビンゴ」

鏡花さんがびしっと私を指した。ただし指ではなくポツキーで。

「何だか……そう考えるとちょっと気の毒だよな」

「むしろそこは人間の機転を褒めるべきところだわ。さっきの話を
例に上げるなら、結局のところおさきを生み出したのは、住民同士の
トラブルを何とかしてやろうという民族社会の〈思いやり〉だも
の。体験者の個人的な欲望だけでは、化け物を想像することはでき
ない。体験者の身に起きた現象が何であれ、社会がその現象を化け
物の仕業として認めなければ、それはただの錯覚よ」

思いやり、か。少なくともこの場では便利な言葉だなあ、って思
う。

社会にとって必要なのは事実じゃなくて、体験者が納得できる答
えなんだ。

さて、こういう話で盛り上がり出すと決まって私の周囲は騒々し
くなる。怖い話をしていると〈本物〉が引き寄せられるって、ホン
トだったんだ……。いや、引き寄せられている、というのは少し違
う気がする。〈彼ら〉は常にどこにでもいる。どこにでもいること

ができる——だから最初から、ここにいたのだ。ここにいて、ここで人間たちが自分たちの噂話を始めた。だからそれを聞いて、反応しているに過ぎないのだろう。

「見えないコトが見えるモノにする——ってことかあ……」

「見えないコトが見えるモノに、か。中々巧いわね。例えば？」

「うーん。……節分、とかそんな感じだよね」

「節分？」

あ、何か期待されてるような気がする。どうしよう。気が引けるけど言いだした手前、続けるしかない。

「……節分で豆まくでしょ？ でも、あれってどれくらいの量を、どれくらいの範囲にまけばいいのか、いまひとつわからないじゃない。『鬼は外、福は内』とは言うけど、私たちの目にはどちらも見えてないんだから。何より見えない相手じゃ、いまひとつ盛り上がりに欠けちゃう。……でも、鬼の役を演じる人がいると全然違う。豆をまく方はぶつける相手がいるだけで盛り上がれるし、最後に鬼の役を演じていた人が外に出てくれば、それで『鬼は外』っていう目的は達成になる。見えないコトが見えるモノにするってこういうこと……でしょ？」

鏡花さんは何も言わない。ただ、驚いたように眼を丸くして、固まっている。

「……あの、鏡花さん？」

「——ココって偶に信じられない程、頭が回るわよね」

……馬鹿にされたわけじゃないと思うけど、褒められた感じでもなかった。

「ご褒美にあげるわ」

そう言って差し出されたポッキーを素直に受け取る。何のご褒美だろう？ いまひとつわからない。ただもらったのは一本だから、私にしたのはその程度の働きだったのだろう。……うん。別にいいけているわけじゃない。

鏡花さんの手許を見やると、すでにポッキーは一箱空になってい

た。えっ……いつの間に？

——カラ？

「そうね。私はその例で思いつくとしたら——」

「ごめん、鏡花さん。話の腰を折っちゃうんだけど、後回しにする
と忘れそうだから今訊いていい？」

「ええ。それは別に構わないけど、何かしら？」

「えっと、さっきの話に戻るんだけど。鏡花さん、カラだけ食べて
も栄養にはならないって言ったよね。でも、そのあとでカラだけ、
っていう言葉をやたら強調してた気がする。気のせいかもしれない
けど、何か理由があるの？」

鏡花さんの片眉が上がった。同時に彼女の唇がゆっくりと弧を描
く。どこか不敵な形の笑み。意外なところを指摘したのだろうか、
それとも初めから誘っていたのだろうか。

再びあの声が聞こえた。

あっちからも。

こっちからも。

そっちからも。

それは——そうだろう。〈彼ら〉はいつだってどこにでもいる。

その声はどんどん大きくなっていき、何かを私に、あるいは私と鏡
花さんに警告しているようにも思える。けれどきつと——もう遅い。

「……ココ。カラだけを食べたとき。私はどうなるって言った？」

「どうなるって。……どうにもならないんでしょう？」

「正解。でもねココ。貴女はこう考えているんじゃない？ ミのな
い食べ物とカラはイコールにあるって」

どこが違うのかわからなかった。ミは魂と書くことができる、と
鏡花さんは言っていた。魂とはすなわち命のこと。だからミのない
食べ物は人に例えるなら——死体だ。ミのない人とカラの人。そこ
に違いがあるとは思えない。

「簡単な話よ。例えばココ。水の入っていない瓶と空の瓶。これは
イコールかしら」

まるでなぞなぞだ、と思いつつ私は少しの間考える。ややあつてかぶりを振った。

「イコール、じゃない。空の瓶は何も入っていないけど、水の入っていない瓶は水が入っていないだけ。ジュースや牛乳が中に入っていたとしても、それは水の入っていない瓶だよ。……あ」

そこまで言って、ようやくわかった。

ミのない食べ物とカラは、一緒じゃない。

じゃあ、ミのない人とカラの人も、一緒じゃない？

でも、そうだとしたら何が。

背後から浴びせられる声がさらに大きくなっていく。これは——違う。近づいている？

「何が——ミのない食べ物には入ってるって言うの？」

魂の抜けたその隙間には——何が。

「最初から入っているのではないわ。放っておけばやがて入るのよ。さぞや、入りやすいことでしょうね。中は伽藍洞なのだから」

鏡花さんが愉快そうに、くすくすと笑った。

何にそこまで駆られているのか。だから何が、と私は半ばむきになって続きを促してしまう。

と、耳たぶに誰かの息が吹きかかったように思えた。凄まじく、おぞましいまでに近かった。

「それはもう——よからぬものが」

それは鏡花さんが発した言葉だったのか。それとも私の近くにいる〈彼ら〉の発した言葉だったのか。

判別はつかないけど、それきり〈彼ら〉の声は水を打ったように静まった。

なんてね、と冗談めかして言うと、鏡花さんは私から視線を外した。

『妖怪考察』（後書き）

ココと鏡花で、ちょっぴりビターな百合モノとかやりたかったけど、全然無理だったでござるの巻。というか、いざやるとしたらどっちが攻めでどっちが受けなんだろうかね、この二人。なんとなく鏡花の方が攻められたら弱そうな分、受けくさいけど。こうガンガン押してたらなし崩し的に！ みたいな感じで。ココが気弱そうに見えて何気に攻めっぽいんですよ。戦闘の時とおんなじで、一端スイッチ入ると凄そう。ぶっちゃけココ以外の義姉妹みんな受けっぱくはないか？ それは言い過ぎかな。つくし割と攻めっ気ありそうだし。あー……さすがにヒナ（四歳児）をそういう眼で見るのはモラル的にあれかー。

……で、本作ですか元々は『イレイザー——氷柱少女——』に入れる予定だったエピソードを修正したものです。ボツのまま眠らせておくのは、もったいないというか、勿体ないかなあと思いましたので。以上。

『水面下』 (前書き)

ある夜、大野木家に隠された秘密を知る少女たちの話。

『水面下』

「鏡花ってさ、どういう男がタイプなんだ？」

シャープペンシルの芯が、ぽきんと折れた。つい手が力んでしまった。肩越しに振り返る。

晶はベッドにうつ伏せになったまま、携帯型ゲームに興じていた。目が合うことはない。イヤホンを片方だけ外しているのは、返事を聴き取るためだろう。開きっぱなしのファッション誌が、肘の下敷きになっていた。自堕落を画に描いたような構図だと鏡花は思う。

「いや、やっぱ玲一兄みたいによ。民族学とかに詳しいヤツがタイプなのかと思って」

鏡花はわざとらしく口許を押さえ、苦笑した。睨むように一瞥する晶。

「別にいいだろ。たとえ私らだけでも、この家にいる間アイツは玲一兄だ」

「箱庭での暮らしも板についたものね。三枚目を演じるのがお上手なこと」

「うっせー三百代言。で、どうなんだよ？ 好きなタイプとかさ、そういうのいねえの？」

「いないわ」

即答した。机に向き直って、作業途中だったルーズリーフをファイルに仕舞う。

「いないって——」

「言葉通り、異性の好みなんてないわ。私が好きなのは玲一だけ。好きになっていいのは玲一だけ」

好きになっていい——そこで罪悪感を露わにした晶の横顔に、酷薄な笑みを浮かべる。気の毒がる必要など微塵もない。この女にとって、自分はまだ可哀想な被害者もとい犠牲者なのだから。

「ねえ、晶。せっかくだし教えてあげましょうか」

「何をだよ？」

「私がどうして彼を好いているのかよ。ええ、教えてあげるわ。何せ色恋の話だもの。異性の好みを語り合うよりは、好みの異性を語り合う方がずっと刺激的だわ。だって私あの人に――」

と、ドアが控え目にノックされた。

晶はゲームの電源を切るとイヤホンを外した。ベッドから降りてドアを開ける。苛立ちのせいか動きが普段より荒い。

「あ、あの……」

ひなが立っていた。怯えたような目をしていた。

「なーんだ。ヒナヒナじゃん」

晶は肩の力を抜いた。

「あっ、晶さん」

「あー、はいはいストップストップ」

ひなと目線を合わせると、慣れた手付きで頭を撫で始める。

「この面子だからって下手に氣い遣わなくていいから。ってか、ユキンコが聞いてたらドン引きだろ？ 私は晶お姉ちゃん、あっちのおっかないメガネは鏡花お姉ちゃん。オッケー？」

「は、はい」

ひなが頷いた。遠慮がちにちらちらとこちらを見ている。胃の痛むポジションだと鏡花は思う。だが、思うだけだ。同情まではしない。何故ならひなはあの娘の味方であり、限りなく晶寄りだからだ。

「そんで？ どーした」

「うん。一階でおかあさんが呼んでたよ。ちよっと手伝ってほしいことあるって」

「ふーん。うっし、わかった――って、内容は言ってなかったのか？」

「うん。手伝ってほしいから呼んできてって。それだけだったよ」
「マジか。中身わかんねえ辺りがチョー怖え。まっ、どうせヒマしてただけだな」

ひなが抱き抱えられる。きゅあっと弱々しい悲鳴が漏れた。

「や、やめてよ。晶さ——お、おねえちゃん！」

「うるへー。これは私のことをうっかり『晶さん』と呼んじやった罰ゲームだ。このままりビングまで行って、いやぁひながウルウル眼でおねだりしてくるもんだからついね、こりゃ将来は男殺し確定ですなぁアハアハとか何かそんな感じのことを言いまくってやる」
「えっ、ええっ!？」

鏡花は頬杖をつき、眉根を寄せる。騒がしい。だが、不快の理由はそれだけではない。ココとささが晶と一緒にいられるのはわかる。あの二人は何も知らないからだ。晶が過去にしたことも、自分たちが過去に晶から強いられたことも、自分たちがこの先辿ることになる運命も。でも、ひなは違う。あの娘は全てを知った上であっち側にいる。向こう岸で晶やあの娘たちと一緒に笑っている。

——理解できないし、したくもない。

「なあ、鏡花」

呼ばれて我に返った。晶の背中を見ると、幽かに笑った気配がした。

「私さ、今は皆のことが好きだ。ユキンコも、ヒナも、ささめんも、つくしも、まこ姉に玲一兄も、もちろんお前のことだって好きだ。大野木の家が、私の家族が大好きだ。私がやったことは決して許されることじゃないし、お前に許してもらえとも思っていない。だから、お前には今のままでもいい。私のことを恨んでいいし、呪っていいし、私のやろうとしてること、どうしても信用ならないっていうんなら、好きなだけ邪魔してくれたって構わない。それでも——」

それでも——？

「私が、何とかしてみせるから」

晶がそつとドアを閉めた。最後まで振り返ることはなかった。椅子にもたれた。ちらと本棚を見遣れば、スクラップファイルが並んでいる。自ら手掛けた妖怪図録——そのほんの一部。玲一に近付くためというのは、所詮表向きの動機だ。これもまた布石の一つ

に過ぎない。自分が生き残るために、大野木鏡花として新たな一歩を踏み出すために。

「信用出来ないなら、好きなだけ邪魔してくれたって構わない？」
胸に手を置く。脈打つ何かを感じる。

それは黒雲を纏い、雷鳴とともに地上へ来たる幻獣。六本の脚を
持つへ心の臓」。

「言われなくても、そうさせてもらうわ」

——貴女の手で生かされたいだなんて言った覚えはないのだから。

『水面下』 (後書き)

そして、昏黒の少女は謀略の糸を張り巡らせる。

『蜜を啜るに飽いたなら』 (前書き)

ある夜、群れる花々と黒い蝶々の話。

『蜜を吸るに飽いたなら』

小さなシャボン玉が、目の前をふわふわと飛んでいる。羽虫のように鬱陶しい。鏡花はそれを手でそつと払い除けた。手に元から着いていた泡がいくつか離れ宙を舞った。そうならないよう気を遣ってこそ「そつと」だったというのに。上っていく泡の行く先を眼で追うと、程なくしてそれは見えなくなった。割れる瞬間は注視していてもよくわからなかった。

「どうかした？」

まこが訊いた。食器を泡立てる手はその間も動いている。

「……何でもないわ」

素気なくそれだけを返して、鏡花は食器洗いに戻った。

二人の背後からは、何とも姦しいやり取りが聞こえてくる。キッチン隔着た向こう側——リビングにいる義姉妹五人がきやあきやあと騒いでいるのだ。

「ユキンコー、みかんの皮剥いてー」

「えっ、やだよ。自分で剥きなよ」

「デデーン」

「……何いきなり」

「指輪だよ指輪。これ外してねーから皮剥けねえの」

「じゃあ、外しなよ……」

「えー、だってこれユキンコちゃんが私にプレゼントしてくれたやつだろう？　いつ如何なるときも肌身離さず持っていたという晶ちゃんの乙女心が何でわからなかねーチミは。すりすり」

「いつ如何なるって、そんな大げさな……」

「あーあ、仕方ねえなあ。もうこりや自分で剥くしかねえかなあ？

あーあ、せっかくのエンゲージリングだったのになあ、すりすり。これからみかん汁でべったべたになるんだろうなあ。あーもうこれダメだ。死んだわ。私とユキンコの想い出死んだわ。みかん汁

で溺死するわ」

「あー、もうわかったよ。私が剥くからっ。剥きますからっ。……言っとくけど白いのまでは取らないからね？」

「へへっ、ラッキー。んじゃ一つ頼むわ」

「ココお姉ちゃーん」

「ん？ どうしたのヒナちゃん」

「見て見て！ 白いのぜーんぶきれいに取れたの！」

「わっ、ホントだ。上手にできたねー」

「えへへ」

「おーホントだ。職人芸だなあヒナヒナ。よっし、じゃあいつちよう私の分も頼むわ。……って睨むなよユキンコ。いよっ！ このジト目美人！ ……えー、別にいいじゃん。本人何か楽しそうだし」「ひなあー、その白いビラビラいらないのか？ いらないんなら私にくれ！」

「えっ？ あげますけど……、どうするんですか？ つくしお姉ちゃん」

「へへーん。この前テレビでやってたんだ。この白いビラビラが健康にいいんだってさー」

「おー、ツクシー博学だなあ。……オイ、何か丸薬みたくなってんぞ」

「ねえ、つくし。言ってることはわかるけど、それだけ食べても多分美味しくないわよ？」

「よしっできた。ほい、ささめねーちん、あーんして！」

「いや、食べるの私なのかよっ」

「えー、だって白いビラビラに栄養あるって言ってたぞ。ウソじゃないぞホントだぞ」

「そうだそうだー。可愛い義妹を疑うとかお姉ちゃんにあるまじき行為だぞー。ささめんには責任を持ってそいつを食べる義務がある！ そーれ、さーさーめん。さーさーめんってあいたあ！？」

——何て耳障りな。

鏡花は心の中で舌打ちをした。隣を見るとまこが楽しそうに微笑んでいた。少なくとも鏡花には、心の底からそう思っているように見えた。だからこそ不可解で——癪に障った。

「楽しそうね……」

「そりゃあ楽しいわ。だってお義母さんだもの。義娘たちの幸せはお義母さんの幸せでしょ？」

——お義母さん？

目を背け、鏡花は失笑する。まこの纏っている空気が幽かに変わった。

「それなら、どうして私の謀に手を貸そうだなんて思ったのかしら？」

鏡花の声は幽かに震えていた。

——莫迦みたい。どうしてこんな間抜けな質問をしてしまったのかしら。訊かなくなたって答えはわかっているのに。

「……それはお互い詮索しない約束だったはずだけど？」

「……そう、だったわね」

一体何に心を奮わせているのだろうと鏡花は思う。嫉妬しているのだろうか、この女に。己を律し、感情を統制することが自分よりも遥かに長けたこの女に。そうだ。それならば、まだいい。そうに違いないのだ、きっと。

「鏡花ちゃんは、ホントにへたっぴねえ」

まこがぐすりと笑みを零した。鏡花は僅かに身を固くした。

「……どういう意味かしら」

「オンとオフの切り替えがへたっぴねと言ったのよ。煙草と同じじゃない」

「煙草……？」

「ある程度味を愉しんだら、適当なところで捨てればいいのよ」

鏡花は息を呑んだ。手が滑って危うく流しに皿を落とすところだ

った。今の動揺をまこに勘付かれただろうか。そのことがやけに気になって、まこの顔がまともに見れなかった。

「だから、義母として今が楽しいという気持は本当よ。でもそれはあくまで義母としての幸せね」

まこは手についた泡を洗い落としていく。

「近いうちに断ち切る縁だからといって、何も粗末に扱うことはないじゃない。鏡花ちゃんも今の内に満喫しておいたら？　大野木家四女『大野木鏡花』をね」

まこは濡れた手をタオルで拭いている。流しには泡に塗れた食器類が積まれていた。あとは鏡花がこれを洗い流すだけだ。

「私……」

鏡花が唐突に口を開いた。まこはハンドクリームを塗りながら鏡花を見た。

「煙草って、吸ったことないわ……」

それは――貴女ほどには割り切れないという鏡花なりの意思表示だったのだろうか。

「あら奇遇。私もよ、鏡花ちゃん。じゃあ、あとはよろしくね」

まこは両手を合わせ小首を傾げて微笑むと、リビングに行ってしまった。去り際に見せた表情は、いつもの大野木まこに戻っていた。鏡花は残された食器を洗いながら考える。例えるならあの少女たちは花のようなものだ。そして、自分は花の蜜を求めて漂う蝶。吸えるだけの甘い蜜を彼女たちから吸ったら、また別の花に移ればいいだけのこと。そこまで考えて、心の中で苦笑する。まこの言ったことと所詮同義であるのに、何故わざわざ花だ蝶だと美化したのか。わかっている。自分は気に入らないのだ。ただ一人を除いて、かつては本当に大切な家族であった彼女らを、煙草などという薬物に例えられたことが。

「なーなー」

くいくいと袖を引っ張られ、我に返った。見ると、つくしが目を輝かせながら立っていた。

「何……」

「はいっ、コレ鏡花ねーちゃんにやる!」

目の前に差し出されたのは一切れのみかん。白いスジの塊でなくて良かったと鏡花は内心安堵する。手を洗ってからそれを受け取ろうとして、つくしがやけに近いことに気付く。そこでようやく鏡花は意図を察した。いや、本当はもっと早くに察していたのだが、期待に応えるかどうか迷ったと言うべきか。

鏡花はそれを口で直接受け取った。口に含み租借する。甘酸っぱい。それこそ花の蜜のようだ。鏡花は思う。つくしは変わらず袖を掴んだままだ。味の感想を心待ちにする眼差しが鬱陶しい。

「……美味しいわよ、とっても」

口許を押さえながら、鏡花は感想を述べた。存外皮が固くてまだ飲み込めていなかった。つくしがへらあと笑った。たまらず鏡花は眼を逸らす。何がたまらなかったのかはよくわからない。ただわかることは、自分がいかに三文役者なのかということ。まこのように、は到底なれないのだということ。袖からつくしの手が離れた。足音が傍を離れていった。

「たっだいまー!」

「はい、おかえりなさい。……どうだった?」

「うん! 鏡花ねーちゃん美味しいって言ってたぞ!」

「そう……。あーこら、膝座るのはいいけどあんまりジタバタしない。私が痛いでしょ」

つくしを始め彼女たちのことを素直に愛おしいと思えていたときは、確かにあった。でも、今はもう無理だ。あの娘が全てを壊して、全てあの娘の都合の良いように作り変えてしまった。あの娘の幸せを維持するためにただけに、作り上げられた偽りの家族。五人義姉妹ではなく六人義姉妹。異分子であるはずのあの娘が、我が物顔であるそこに座っているという屈辱。

「ココちゃん。お姉ちゃんにもみかん剥いて」

「えっ、何で姉さんまで……」

「そーだそーだ。もういい年なんだからみかんくらい自分で剥けよこの年増って眼えー！ 皮がぱきよって！ 汁がぱきよって！」

「あっ、晶おねえちゃん！？」

「でーん」

「……指輪、は関係ないよね」

「さっきお皿洗いし終わったあとにクリーム塗っちゃったのよ。だからおねがーい」

「……姉さん、あれ塗ったあとに食べ物に触っても大丈夫なやつだからって通販で買ったんじゃないっけ？」

「いやだあココちゃん。そこは理屈じゃなくて気持の問題よ気持の問題。それにどうせ剥いたら手は洗わないといけないでしょう？」

「そんなのもったいないわあ」

「は、はあ……」

花たちの戯れ合いはなおも続いている。黒い蝶々を一匹置き去りにして。

鏡花は口に指を入れた。親指と人差し指を二本、みかんの皮を摘まみだした。唇とその間に、一筋の銀糸が薄らと架かった。まるで未練のようだと鏡花は思う。もう中身は食べ尽くした。甘いひとときは充分に堪能した。それならば、もう――。

「要らないわね」

鏡花はそれを、三角コーナーに捨てた。

『蜜を啜るに飽いたなら』 (後書き)

次に移る花は、心の内にないのだけれど。

『心を満たす者は』 (前書き)

ある晩秋、白き少女と妖怪たちの日常茶飯。

『心を満たす者は』

日傘を畳むと、すうと息を吸い込んだ。枯れた葉っぱの匂いがした。

学校の帰り道には、わけあって人通りの少ない並木道を選んだ。何で人気がないのかについてはよくわからない。山に近いし、もしかしたら熊でも出るのかもしれない。

色褪せた木々の葉が、秋風に吹かれて踊っている。落ち葉の絨毯から、鮮やかだった赤や黄色が抜け落ちているのは、やっぱりちょっと残念。

私は口許を押さえながら、小さく思い出し笑いをした。

晶ってば、落ち葉に火を点けてすぐさま芋を入れようとして鏡花さんに怒られてたっけ。ちなみに、正しい焼き芋の焼き方は一旦落ち葉を焼いて灰にして、大分温度が下がったあとにさつま芋を入れるんだとか。……まあ、私も鏡花さんに言われるまでは晶と同じ考えだったんだけど。

私は歩きながら、腕時計を見た。足を止めて、周囲に視線を走らせる。切り替えのときに不意打ちなんてこと、〈彼ら〉はしてこないだろうけど、まあ念のため。

閉じた瞼を撫でる。どこか寂し気な秋の声が遠くなった。眼を開いた。

枯れ葉が——真っ赤に色付いていた。

落ちているそれも、宙を舞うそれも、耐えるように枝に付くそれも。

どれもみんなきらきらと、紅い星屑のように煌めいていた。命の抜けた景色に、新しい命が吹き込まれたみたいだった。

思わず、溜息が漏れた。

私は、髪の毛に付いていた苔を取ると耳の中に入れた。ゆっくりと眼を閉じつつ、イメージを開始。

イメージするのは〈猫〉。……うん、黒猫にしよう。黒い方が何だか強そう。

静かでいて煌々と輝く満月のような瞳。

撃ち出された弾丸みたいに走るその姿は、まさに黒い閃光。研ぎ澄まされたその爪に、切り裂けない獲物なんていない。

私は、かっと眼を見開いた。直後に前へと走り出す。憑依の副作用のせいで、まるで大きく波打つ地面を走っているみたい。

ずしんと地面が揺れた。原因はわかってる。あの四本脚の怪物——タコゾウが前脚で思いつき叩いたのだ。ついさっきまで私がいた地面を。

タコゾウは、その名の通り蛸と象を合わせたような生き物で、蛸の丸い頭から八本の触手の代わりに、象みたいな太い脚が四本ぶら下がっている。全長はバスケットゴールより僅かに高いくらい。その身体は頑丈な格子模様の皮膚に覆われている。

と、目の前の地面が膨れ上がった。

思った通り、そこから跳び出して来たのは、犬顔をした獣人——モヒカンだった。私と同じくらいの身長だけど、赤いモヒカンの分、私よりちよつと大きく見える。

捲れ上がった苔の破片が、私の顔に飛び散った。眼潰し代わりだ。思わず眼を細めてしまう。

モヒカンはすでに、両手で握った西洋剣を振りかぶっていた。切れ味は悪そうだけど、力一杯頭に叩き付けられれば、どのみちそれでお終い。

だから、私は——前へ進んだ。モヒカンの懐へと跳び込んだのだ。モヒカンが短い鳴き声を上げた。怯えた私が後ろへ下がると読んでいたのだろう。その首に、私は日傘の持ち手を引っ掛ける。両手でそれを引っ張った。そうして引き寄せられた顔面に、跳び膝蹴りを叩き込む。モヒカンが大きく仰け反った。さらにその肩を掴んで、モヒカンを後ろへ引き倒した。

私は、咄嗟に反転する。そこには、うつ伏せに倒れているモヒカ

ン。そして、それを危うく踏みそうになっているタコゾウの姿。

タコゾウはすんでのところの前脚を止めた。狙い通り。

私はその脚に跳び移って、タコゾウの身体を駆け上がる。それこそ木に登る猫のようなすばしっこさで。頭のとっぺんに着いた。私の握り拳くらいはある眼が一つ付いていた。近付いて、日傘の先端をそこに突き刺そうとして——ギリギリのところで止めて見せた。

「足許の彼を踏み潰してくれれば、ここは潰しませんけど——」

瞳が震えている。色合いがマンガに出てくる毒キノコみたい。

「降参してもらえませんか？」

無表情を保ち、下にいるモヒカンにも聞こえるくらいの声で、そう尋ねる。

ややあって、タコゾウとモヒカンが声を合わせて応えた。

私は——溜息を吐いた。

『まっさか、不意打ちして勝てねえとはな……』

モヒカンは胡坐を掻いたまま、苛立たしげにごちた。傍にあった枝切れを筆に変えて、くたびれた甲手に正の字を書く。言うまでもなく敗北の歴史だ。それも大野木ココ限定。字のサイズが負ける度に小さくなっていくのは、決して気が小さくなっているからではない。これからも正の字を書けるようにと、充分な余白を残しているだけである。それを世間では普通「気が小さくなっている」と言うのだと、彼は知らない。

『あの嬢ちゃんも変わってるよな。自分以外の人間を襲わないと約束してくれたら、今後どんだけ戦ってもトドメは刺さないなんてよ……ああ、そうだな。確かに俺たち寝なくても調子が崩れるなんてこたあねえし、飯を食わなかったところで飢えることもねえし、いい女を偶々見かけて乱れる心はあっても疼く身体の部分がねえが、それでも心で生きてる以上刺激は必要だからな。そこんとこ踏まえ、た上で三下の俺らに付き合ってくれてんだろうさ。……オウ、やっぱ戦いで昇華が一番手っ取り早いもんな。タコ助、お前「昇華」

とか難しい言葉知ってんな』

モヒカンは大の字に寝転んだ。適当な小石を掴むと、そこに苔を集中させる。

『けどよ。なーんか見てて不安なんだよ、あの嬢ちゃん。目が離せないつーかよお。……ケツ、言われなくなつて、それが連戦連敗してるヤツの台詞じゃねえことくらいわかつてらあ。普通さ、優しさってのは余裕があつて初めて出てくる感情だろ。自分のことで泡吹くくらいいいっぱいいっぱいなのに、それでも誰かを助けてやろうなんてバカ、まず存在しねえ。……何？ あの嬢ちゃんがそのバカだつて言いたいのかつて？ それが微妙に違うんだよ。あのな、あの嬢ちゃんの誰かを助けてやろうって気持ちには、純粹に優しさだけから来てるもんじゃねえと俺は踏んでんだよ。俺が思うによ、あいつ、優しさとか思いやりとか、そういうのより先に「自分何かどうなつてもいい」って感情が来てる気がすんだよ。……ああ、こんだけ戦つてようやくわかつてきたんだ。あの嬢ちゃんには一緒に戦う仲間がいる。でも、あれは仲間頼ってる戦い方じゃねえ。あつ、これ悪い意味で言つてんだぜ。要は仲間が果たすべき役割の分まで自分でやろうとしてんの。自尊心の低さ故の個人プレーってヤツ。傷付くところを見たくねえから、できるだけ仲間を矢面に立たせたくねえのよ。……あーはいはい。そうですねー。それも負けっぱなしの俺に言えるようになって、何？ そうじゃないって？ どうしてそこまであの嬢ちゃんを気にかけてるのかって？ ……ハッ、おいおい言わせんなよ恥ずかしい』

モヒカンは身体を起こした。小石は好物のスイカに変えたつもりだった。しかし、実際に出来あがったものを見ると、つい苦々しい笑みが漏れた。どうやら意識が話に傾き過ぎていたらしい。

『まあ、心乱されたつてところさ』

がぶりと豪快に食らいつく。瑞々しい。皮は勿論、中身まで真っ白だった。

誰かさんの肌の色にそっくりだった。

『心を満たす者は』（後書き）

同時に心も乱していきましたとき。
基本ロリコンしかない。

『移ろわぬ砦』 (前書き)

ある昼休み、密ごころを抱く魔女二人。

『移ろわぬ砦』

目を開けると、頭の芯がじんと痺れた。眼を閉じてしまう。赤い星がちらついている。小さな煌めきだが儚いとは思わない。どうせ消えはしないのだから。身体に染み付いて離れてくれはしないのだから。

ゆっくりと身体を起こした。額に触ると、寝汗で前髪が張り付いていた。壁にもたれかかって天井を仰ぐ。保健室の天井は白かった。決して赤くなどなかった。

——まさか本当に眠ってしまったなんて……。

しばらく横になっていただけのつもりでいたが、そこまで身体にガタが来ていたということだろうか。わざわざ保健室に行くほどのこともないとささめには言っていたが、実際こうなってみると迷惑をかける羽目にならなくて良かったと思う。

いや、もし教室で倒れるようなことがあれば、迷惑をかけるのは保健委員か。でも、一番に助けてくれるのはきつとささめだろう。

誰よりも早く、傍に駆け付けて来てくれて——。

「誰、よりも——」

呟いた唇にそっと触れる。

それは——氷垣君よりも早く？

と、引き戸の開く音がした。誰かを確認しようとベッドを仕切るカーテンに手をかけたところで、

「ああ、開けなくて平気よ。それでもお話はできるでしょう？」

今一番耳にしたくなかった声に、手が止まった。

年の割にどこか艶めいた、それでいて他者を明らかに睥睨^{へいげい}しているとわかる、楽しげな少女の声。カーテンの向こう側にいる彼女に気取られぬよう、そっと息を吐く。気を落ち着けた。

「川田先生は？」

「川田——ああ、保健の先生。机でうたた寝していらっしゃるわ。」

いくら昼休み中だからって、職務怠慢もいいところよね」

とぼけるように肩を竦める様子が、嫌でも目に浮かぶ。

「貴女、そんなこともできるのね」

「あら、まるで私が子守唄でも歌ったかのような文言だわ」

幽かにベッドの軋む音がした。腰を落ち着けて話すほどの要件があるということだろうか。だとしたらひどく億劫——と眉を顰める一方で、今はまだ昼休みなのだと知る。もう随分と長い間、眠っていたように感じていたのだけれど。

「何にせよ、これで藤枝先輩と二人でお話ができるわね」

「貴女とお話？」

「ええ、それはもうじっくり——というのは冗談よ。長話が身体に障っては本末転倒だしね」

——本末転倒？

「それは——」

「貴女に地気を操る幻獣の力を託した者として、貴女の身を案じているということよ」

一瞬我が耳を疑う。だが、すぐ腑に落ちた。珠置山で初めて彼女に会った夜、彼女から地宰を授けられた際、忠告されたことを思い出したからだ。

「そうね、貴女はまだ私に死なれては困るのだったわね」

「そういうこと。でも、流石に驚いたわ。結界を形成するために兎の死体を利用するだなんて」

蘇子の肩が小さく震えた。

「アイディアを持ち出したのは貴女でしょう？」

「持ち出しただけで、強制した憶えはないわ。普通アイディアを与えられたところで、あんな残酷なこと中々実行に移せないものよ？」

同じ恋する乙女としてそのひたむきに嫉妬しそうだわ」

極力衣擦れの音をさせぬよう、蘇子は自分を抱き締める。とにかく怯えている事実だけは、彼女に勘付かれたくなかった。

「要件があるなら、それだけ話してもらえないかしら」

「そう？　じゃあ一つ質問。貴女どうして兎を手にかけるような真似をしたの？　いいえ、どうして珠置山に邪の召喚を賦活する結果を創りたいと私に相談したの、と訊いた方がわかりやすかったかしら」

「ごめんなさい。質問の意味がよくわからないわ」

素知らぬ振りをしたわけではない。確かな本音だった。得体の知れない不安が胸に募っていく。

「貴女が珠置山を牙城としたのは、偏に氷垣蓮太郎のため。彼が奪っていた命を無傷という檻に閉じ込め生かし続けることで、彼が犯した罪をあくまで貴女の善悪感情基準でなかったことにするため。でもね、藤枝先輩。私やっぱり無傷一匹を隠すのに、あの牙城は大き過ぎると思うのよ。貴女ほど利口な人間なら、もっと効率の良い牙城を築くことだって出来たはずなのに。ねえ、本当はわかってるんでしょ？　兎を装置として生かした結界だって、あの山には過ぎ足るものだって。貴女から外敵でも作らない限り必要のないものなんだって。なら、何故貴女はそれを欲したのでしょね」

蘇子は両腕に力を込める。細い指が二の腕に食い込んでいく。

「想いは目には見えないもの。日毎に移り変わるもの。形がないと不安なのよね。それはもう嫌でも目につくくらい大袈裟な形が。そこに途方もない労力が費やされていればいるほど、貴女の心は救われるのよね。安心できるのよね。ああ、今日も私の一途な想いは変わっていないって」

彼女がニタリと笑った気がした。

「ねえ藤枝先輩。昨日の〈あれ〉を見ても貴女の想いは変わらなかった？」

〈あれ〉が何を指しているのか、蘇子にはすぐにわかった。

昨日の夕方、稲荷神社にて仲睦まじく語り合う二人の男女。形だけなら良かった。形だけなら見て見ぬ振りをした。

でも、自分は気付いてしまった。

氷垣蓮太郎が大野木ココに向けるあの眼差しに。

自分には一度だって向けられたことのない、あの瞳に込められた想いに。

「その様子だと、まだ氷垣に対する想いは色褪せていないようね」
はっとして、隣を見た。当然カーテンは引かれたままで、こちらの様子など見えているわけがない。俯いて奥歯を噛み締める。まるで掌の上で踊らされているようだ。

「ああ良かった。安心したわ。もし貴女がその想いを捨ててしまったのなら、私は地宰を取り上げなくてはならなかったもの」

「その確認が、ここに来た理由なの？」

「さあ、どうかしら。貴女の容体が純粹に気になっていたのは事実だけれど」

仮眠を取りたかったのも理由の一つねと言って、立ち上がる彼女。

「仮眠？」

「そう、私が隣で寝ていては落ち着かないでしょう？」

ならどこで休むつもりなのだろう、ソファだろうかと思ふ。

足音が離れようとする。蘇子は目を伏せ、口の中で小さく、

「別に――」

何故か――。

「隣で休んでくれたって構わないわ」

そう呟いた。それは自分なりの抵抗だったのかもしれない。何か一つでも彼女の予測を裏切る行動が取りたい。今ならば彼女は目を丸くしているだろうか。

「あら、捉えようによってはそそられる台詞。それじゃあお言葉に甘えて」

彼女に背を向けて寝転んだ。布団に潜る音が聞こえる。沈黙が降りて、息苦しくなった。

――落ち着かない。

「ねえ、貴女にとってあの義姉妹は何なの？」

どうしてこんなことを口にしたのだろうと蘇子は思う。返事はな
いが続けてしまう。

「私がどういう人間かはもう知っているでしょう？ さっきの確認
で、貴女が氷垣君と大野木ココさんの関係を念押ししたことで、私
はあの娘に危害を加えるかもしれないのよ。そんな事態が想定でき
ない貴女ではないでしょう？」

自分は、一体彼女に何を望んでいるのだろう。何と答えてほしい
のだろう。

「本当のところ、自分でもよくわかっていないのかもしれないわ」
返って来たのは、無感動な声。

「でも、昔とは違う。だからもう——愛してはいないわね」

危害を加えたいのならココでもささめでもご自由に、ただし勝ち
目はないと思うけれどと彼女は付けたす。次いで寝返りを打つ音。
見なくてもわかる。彼女はきつと私の何もかもに背を向けたのだ。

蘇子は唇をほとんど動かすことなく、そう——と呟いた。

『移ろわぬ砦』 (後書き)

あの砦さえそのままならば、きっとこの想いも変わらぬと信じて。

『木魅事変』・前篇

コンコンと窓をノックするような音が聞こえた。
今まさに熱いコーヒーを口に運ぼうとしていたアカシャの手が止まる。

ラフなオールバック、三白気味の眼、鋭角な顎のラインに蓄えられた髭、黒ワイシャツとストレート調のスラックス——アカシャは机にカップを置くと、グレーのカーテンに閉ざされたそれを睨んだ。革張りソファから腰を上げると、窓に近付いてカーテンを引いた。
誰もいなかった。

ただ、タワーマンションの一室から見える夜景が視界に広がった。
一夜街上戸地区の近代的な街並みがある。

アカシャにとっては、ただそれだけの画である。

窓を開けると、カーテンがふわりと風を孕んだ。潮騒のようにリズムのあるものではなく、常に一定の速度を保って吹いてくるそれに混じって、何やら黒い霞のようなものがアカシャの側を通り過ぎて行く。かと思えば、それはゆらりと踵を返し、さっきまでアカシャがいたソファの上に音もなく実体を現した。

「依頼の話か」

アカシャは窓を閉めると、後ろ手でカーテンを引きながら振り向いた。

上月こよいが、まるで最初からそこにいましたと言わんばかりに、ソファに背を預けたまま、アカシャのコーヒーを我が物顔で啜っていた。

「さあどうでしょう。単なる息抜きかもしれませんよ？ 今夜は忍の舞台としては少々好天が過ぎますゆえ」

上月こよい——黒髪のショートに映える赤縁眼鏡、レンズの奥で細められた紅紫の双眸、黒い小振袖に咲く金色の山茶花、ホットパンツのような短袴からすらりと伸びた脚には、帯と同じ堇色をした

ストライプのニーソックス。

忍とCランクイレイザーを兼業しているこよいは、相変わらず忍ぶには相応しくない恰好をしていた。

こよいが本業としている忍とは、依頼によって相手組織の内情を調査したり、機密書類を盗み出したりする民間の諜報員である。とはいえ、こよいの仕事は専ら依頼書の運び屋であった。本来アカシヤのようなフリーのイレイザーに対する事変関係の依頼は、ヴンダーカンマー管理機構公認の口入屋を通すことになっている。しかし個人的に信頼できるイレイザーがすでにおり、またその依頼を表に出す、つまり通常の運送手段を用いると都合が悪い場合は、こよいのような運び屋が直接そのイレイザーの許へ依頼書を届けることもあった。

「ならさっさと依頼書だけ置いて帰って、俺の息抜きに貢献してほしいもんだな」

アカシヤは対面のソファに腰を据えると、煙草を咥えた。テーブルの上のライターを取ろうとしたときには、すでにこよいが火を差し出していた。淀みないその動作に、アカシヤは眼前のこよいとアルトの姿を重ねてしまう。

アルト・タンホルダー——通称『一夜街の赤い狼』。かつて一夜街で最大の勢力を誇っていた不良グループの重鎮として暴力に明け暮れていた少女は、現在妓楼から依頼があればどんな相手のツケでも回収する掛廻を勤めている。アカシヤに叩きのめされて以来、彼のことを「旦那」と呼び親う舎妹しゃまいと化したアルトだが、並みのイレイザーや魔道士なら導力による肉体強化に頼らず拳闘のみでノックダウンできてしまうその実力は、今なお健在である。

「如何なさいました？」

上目遣いのこよいにそう訊かれ、アカシヤはようやく穂先を炙った。

「いいや……何でもない」

「大方小生の姿に赤狼様の幻を見たのでしょう。確かに胸のサイズ

は同じくらいでしょうが」

こよいは、サラシのせいでいくらか控え目に映る胸の丸みを撫で付けながら、

「八五ですよ」

アカシャが訊いてもいない情報を妖しげな笑みと共に伝えた。

「まあ、胸のサイズは一度揉みしただけはミリ単位でわかると豪語する一夜切つての好色漢——黒徨様こくおうには、余計な情報だったかもしれない」

「そうか。じゃあ若干アルトの方がデカいな」

こともなげに吐かれたアカシャの言葉に、露骨に目を細めて見せるこよい。

「……何やら言い知れぬ敗北感です」

「サイズの話か？」

「いえ、そっちではなくて。むしろ小生がお尋ねしたいのは何故黒徨様が舍妹ポジに過ぎぬ赤狼様の——嗚呼、もういいです。このお話はまた、一夜最強のイレイザーとして多忙な毎日を過ごされていることで、幾層にも幾層にも蓄積なさっている黒徨様の疲労とストレスが幾分か解消されたときにでもおいおいすると致しましょう」

こよいは袂から封筒を取り出した。テーブルに置かれたそれをアカシャが手に取る。

「依頼主は丸目居士まるめこじろう様。御依頼の内容は、下戸地区かしにある然谷ねんこくの地下排水施設を棲家しやにしているBランク相当のギノー『人面樹』の『抹消』。抹消以外の掃討手段は認可せずとのことです」

アカシャは封を切ろうとした手を止めると、眉を顰めた。

丸目は、百々目鬼屋ひゃくもくやという口入屋を営んでいる中老の男だ。人を見る目は『橋姫』の番頭である庵並みに長けており、無能なイレイザーには決して仕事を幹旋しない。アカシャも当然丸目とは顔なじみで何かと世話になったからこそ、元魔道士であり現イレイザーである丸目の実力は身を持って知っている。イレイザーの口入に手間取る事変があれば、スレイブを連れて自ら解決に当たる、実質口入

屋組合の長とも言える丸目がわざわざ自分に依頼をしてきた。それだけでもアカシャには引かかる点である。しかし、アカシャが真に引っかけたっていたのはそこではなかった。

「ちよつと待て。どうしてお前が依頼の内容を知ってる？」

「おや、まさか運び屋ともあろうものが密書の中身を読んだのか、とても言いたげな眼差しですね。小生はそれを受け取る際、直接聞かされたのですよ。こちらから御伺いするまでもなく、丸目様御本人の口から此度の依頼の中身を」

こよいは、アカシャの訝しむような視線などどこ吹く風といった顔でコーヒーを啜る。

「ああ、ところで黒徨様。物は相談なのですがその人面樹討伐、僭越ながら小生めも御一緒に宜しいでしょうか？」

「——それ、訊く相手間違ってるんじゃないか」

「丸目様よりすでに同行の許可はいただいております。無論イレイザーとしての『共闘』ではなく、あくまで見学者としての『同行』ですので、万が一小生が事変解決に加担するような結果になったとしても取り分を山分けしろなどと不届きなことを申したりは致しません。残すは黒徨様の御一存のみですな」

アカシャは、手紙をテーブルに置いた。指に挟んだ煙草を口から離すと、細長い紫煙をゆっくりと吐いた。

「一つ教えてくれ」

虚空に溶けゆく煙に向けられていた眼が、心持表情を固くしたこよいに据えられる。

「お前がこれに拘る理由は何だ？」

こよいは居住まいを正した。やや間を置いて応えた。

「一夜街の地下河川にてガ族に酷似した〈異形〉^{ヴァリアント}を目撃した——あの暗渠^{あんきょ}を抗争の奇襲ルートとして用いている破落戸^{ごろつき}連中より得た情報です。彼らの話によれば、自分たちを襲って来た異形の群れは皆一様に黄色く濁った眼をしており、大きく切り開かれた腹部は中身が花粉のようなもので薄く覆われていたそうです。小生はそれを人

面樹によって操られている『ガ号』ではないか——と睨んでおりま
す」

ガ号——こよいが獣の尻尾を切除し、特技によって獣の耳を隠す
ことになった要因。

単なる地下河川の調査なら、わざわざ依頼の機に乗じる必要はな
い。しかし、そこに自分よりも格上と思しきギノーが関係している
とあれば、こよいが慎重になるのも頷ける。

「人面樹は野良なのか？」

「丸目様は——コントラクトリングを見たとおっしゃっております
た」

コントラクトリング——ギノーを隷属させるためにイレイザーが
用いる、魔道文字によって構成された抑制の輪。これを装着したギ
ノーは、主の命ある限り復活を続け、主の死と共に自身も消滅する
というルールを課せられることになる。

「黒徨様……」

こよいはそれきり何も言わない。ただ、真剣な眼差しをアカシャ
に注ぐばかりである。

アカシャは心の中で苦笑した。こよいはわかっているのだ。アカ
シャが、例えばここで相手に煽てられようが、懇願されようが、その
相手が足手纏いになるなら決して連れて行かない、そういう男だと
いうことを。そして、アカシャもこよいについてわかっていること
がある。この女は、何も忍としての腕が未熟だから運び屋という立
場に甘んじているわけではないのだ。

——残すは黒徨様の御一存のみですな。

「丸目の考えがいまいち読めねえのが気がかりだが——」

アカシャは煙草を灰皿に押し付けると、こよいの望み通り飾らな
い言葉を口にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3408o/>

イレイザー ー仁和歌者ー

2011年5月28日21時27分発行